



思考の深さ、広さ、 構造、時間



株式会社フロウシンク
代表取締役/中小企業診断士
米倉 博彦

「自分は考えが足りない」仕事をしていてそう思ったことはないだろうか？じっくり考えたはずなのに、簡単な指摘にすら答えられない…もしかしたらあなたの考え方にはどこか「漏れ」があるのかもしれない。

■思考の深さ、広さ、構造、時間

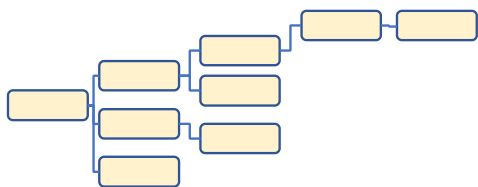
ちゃんと考えているかどうかを判断するためには、フレームワークの考え方が有効だ。物事を何かの基準で分けた「枠」を作り、その枠を埋めていくことで、思考の漏れをなくすることができる。

今回はその一つとして「深さ」「広さ」「構造」「時間」という4つの枠を設けて考えていく。これは仕事でも、プライベートの人間関係や人生の計画でも何にでも適用できる、汎用性の高いフレームワークだ。

■ツリー構造で考える

まず前提として、物事を「ツリー構造」で考えることから始める。ツリー構造とは、ある事柄に対して問題や原因など、その事柄を構成している要素をツリー状に書き出すことで、解決法を導き出す思考法だ。対象となる問題によって「ロジックツリー」「マインドマップ」「イシューツリー」「ピラミッドストラクチャ」「アウトライン」などと呼び方は変わるものの、ツリー構造で物事を分析するという意味では同じものだと言える。(図1)

図1：ツリー構造



手書きでも構わないが、ツリー構造は思考の過程で頻繁に項目の入れ替えが発生するため、間違った場合の修正が手書きでは手間だ。専用のソフトウェアもあるのでそちらを使った方がいい。無料のものであれば、Free Mind (フリーマインド) というソフトが有名だ。クラウドサービスもいくつかある。また、広く普及しているマイクロソフトのワードの「アウトライン機能」が似たような機能を実現している。

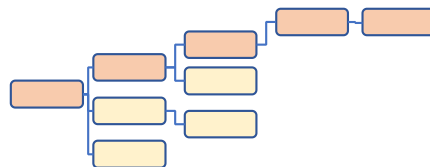
壁やホワイトボードに付箋紙を貼るというのもお勧めだ。筆者はデジタル大好き人間で、あらゆることをパソコンで行いたいと思っているのだが、この過程だけはいまだに付箋紙から離れられない。

■深さ

まずは「深さ」だ。よく「なぜ」を5回繰り返せと言うが、これは思考をもっと深くしろという意味だ。ツリー構造が深くなればなるほど、物事の本当の理由に近づける。

例えば、売上が芳しくないといった問題があったとして、「じゃあ、ガンガン営業をしよう」と言うのは「浅い」解決策だろう。なぜ売上が下がったのか？ツリーを深く掘り進むことで、より良い解決策が見つかる。(図2)

図2：思考の「深さ」



では、いったいどこまで掘り下げればいいのか？と言えば、「納得のいく原因に辿り着くまで」という回答になるのだが、経験上、5段階くらいは掘り進めない原因には至らないと思う。

■広さ

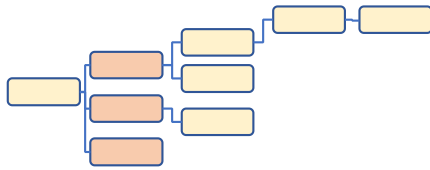
次に「広さ」について考えてみよう。特定の分野にだけやたらマニアックな知識があるが、視野が狭い人はまさにこの広さ不足である。

人はつい、最初に気づいたポイントに拘泥しがちだ。視野が狭まり、他にも解決策があるかもしれないことを忘れてしまう。

常に「他に何かないか」「抜け漏れはないか」を考えることで、十分な広さを確保するよう努める。これができていれば、上司の「**は考慮したのか」という意地悪な突っ込みにも冷静に対処できるはずだ。(図3)



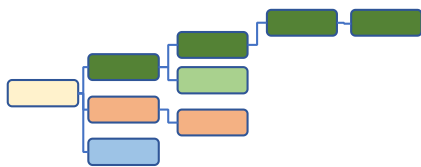
図3：思考の「広さ」



■構造

深くて、広い。そんな思考ができたとしても、全体の「構造」がぐちゃぐちゃでは、正しい答えには辿り着けない。おかしい繋がりはないか、変に具体的だったり抽象的すぎたりして、他の項目から浮いているところはないか確認する。構造がおかしければ、ツリーのつながりを組み直していく作業を行う。作業の過程で見逃していた「漏れ」が見つかる、つまり「深さ」も「広さ」もまだ不十分だったということもよくある。(図4)

図4：思考の「構造」



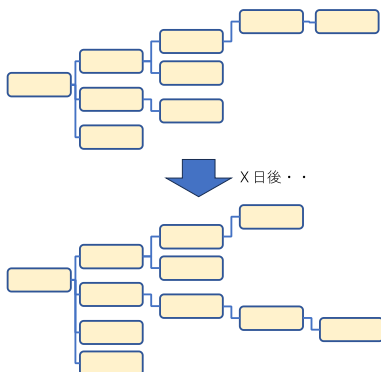
■時間

最後に「時間」だ。これも忘れがちな要素だ。しっかりしたツリー構造を作ることができて、「よし、これで十分だ」と満足しても、それはあくまで現時点のものに過ぎない。時間が経てば状況が変わり、ツリー構造も変化していく。

人は、自分のものには愛着を持ってしまう。それがどこにでも売っているような何の変哲もないマグカップだとしても、手放すのに拒否反応を示すものだ。形のないものも同様だ。

一度苦心して作ったツリー構造を、時間が経ったからといって変更することに抵抗感を覚えてしまうが、それでも変更しないといけない。変更しなければ、それは現実に即していない、使えないものになってしまうからだ。(図5)

図5：思考の「時間」経過による変化

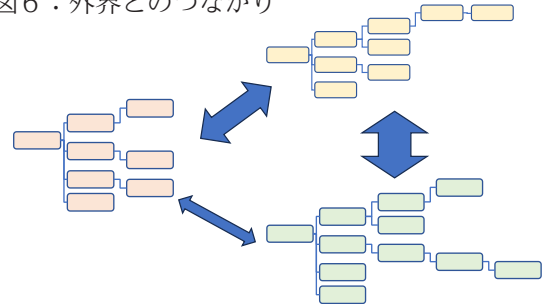


■外界とのつながり「システム・オブ・システムズ」

世の中の全ては繋がっている…と書くと、何やらオカルトめいているが、単体で存在するのはなく、周囲と何らかの形で接続せざるを得ないのは事実だ。企業活動は取引先や協力会社、顧客や自治体など多数のプレーヤーとのつながりがなければ実現しない。

ツリー構造でいくら思考を分析したとしても、外部要因により状況が大きく変わってしまうことがある。例えば政府の規制強化(または緩和)、技術の発展、資源の枯渇など…こういった外部とのつながりを含めた全体を「システム・オブ・システムズ」と呼ぶ。基本的には自分の受け持ち範囲だけ考えていれば良いが、せめて外部とどういう形で繋がっているか程度は把握しておいた方がいいだろう。

図6：外界とのつながり



■どこまでやればいいのか？

さて、この作業は慣れてくると結構面白くなる。そして、やろうと思えばどこまでも深掘りできてしまう。ではどこまでやればいいのか？答えは「自分が抱えている問題を解決できる程度の、納得がいく理解が得られるまで」となる。非常に少ないツリー構造で全体の見通しが開ける場合もあるし、ものすごく複雑なツリー構造を作成しなければ理解できないような複雑な物事もある。さらに言えば、ツリー構造では表現できない問題もある(その場合はシステム思考におけるループ図という別のツールを活用することになる)。

自分の思考の「深さ」「広さ」「構造」「時間」を確認することを知っているかどうか。それだけでも日々遭遇する物事への対応が大きく違ってくるはずだ。

参考文献：

「解像度を上げる」馬田隆明著/英治出版
「考える技術・書く技術」バーバラ・ミント著/ダイヤモンド社
「ロジカル・シンキング入門」茂木英昭著/日経BPマーケティング

今日からできる仕事術